

性犯罪調書 汚された女性たち 第四話

〔 監禁排泄・前編 〕

制作／人工美少女製作所

ふあつときゃつとDX

序章 女警官パット

「くううっ！ もっ！ ダメエエ……ッ!!」

——ミチツ……ミチツ……。

「ハハっ……我慢は体に毒だぜえ……早く出しちまいな……」

「うっ！ クウウツ……!」

あたしの身体はもう限界だった。

何日も排便を我慢させられ、今度はそれを開放するため、粗末な便器に跨がらされている。

排尿は何度もした後だ。便器には何日か分の尿が溜まり、排便されるのを待っているかのようだ。

——モコツ……モコツ……。

「あっ！ アアアツ!!」

肛門が盛り上がり、我慢の限界を告げる。

(もう……ダ……メ……)

「うああああああああああああああっ!!」

——ブッ!!
どうしてこんなことか——。

第一章 毘

(えっと……確か、こっちの机が……)

あたし、夏空^{なつぞら}あかねは独自に連続誘拐監禁事件を調査していた。ただし、生活安全課の婦警である自分の本来の職務ではない。しかし……どうしても気になることがあったのだ。

今は草木も眠る丑三つ時、夜勤で人気の少ない時間帯だ。

「あ……ここだ……」

人目を気にしつつ、小さくつぶやく。

ここは刑事課、丁度、今は全員出払っているようだった。

(今がチャンスね……)

真鍋^{まなべしんや}信也^{しんや} 巡査……これは彼のデスクだ。

あたしは手早く引き出しなどを探っていく。

(ん……書類とかメモとか……そういったものはないわね……)

(後はこのノートパソコンだけ……)

県警から支給されている、個人の専用端末だ。

——カチツ……フィイン……。

電源を入れ、立ち上がるのを待つ。

(早く……早く……)

気が焦るが、型落ちのハードディスク搭載パソコンはなんとも遅い。

——テン、テレ、テンツ。

(あっ！ ついたっ！)

ようやくパソコンが起動し、デスクトップが表示される。

(えっ!? なにっ!?)

唐突にアプリケーションが自動的に起動し、全画面表示された。

(な、なにこれ……?)

——カチツ！ カチツ！ カチカチ！

——カタツ！ カタカタツ！

デタラメにマウスとキーボードを操作するが、何も反応はない。画面には、幾何学模様のような謎の文様が回転しているだけだ。

(うっ！ き、気分が……ああ……)

段々、意識が遠のいていく……。

(そんな……畏……だったの……?)

(せめて、これ……を……)

——バタツ……。

そこで、あたしの意識は途切れた——。

第二章 監禁

「んんう……ゲホッ！ ゲホッ！」

埃っぽい空気にもせ、あたしは目覚めた。

(な、なに……ここ?)

辺りは見たこともない廃屋……廃屋の中だ。

起き上がろうとするが——。

——ガチャッ！ ガチャッ！

(なっ!? これっ!? 手錠っ!?)

手は後ろ手で拘束され、足にも手錠がかけられていた。いつの間にか、着ていた上着も脱がされている。

——ガチャッ……ギイッ……。

その時、廃屋の扉が開き、誰かが入って来た。

「ヒヒッ！ 丁度、目を覚ましたな……」

「あなた……誰……?」

そこには、見たこともない人相の男……浮浪者の様だった。

(こいつが連続誘拐監禁事件の犯人……? あたしが間違っていたの……?)

「なんてことはねえ……只の物好きの男だ……」

——ジリッ……。

近づいてくる男に、後退りする。

「やっ、と、止まりなさい！ 近づかないでっ！」

至近距離まで近づいてきた男が手を伸ばす。

「ヒヒ……ひん剥くのを忘れちゃったからよお……」

——ガッ！

「——ヤッ！」

「ほらよっ！」

——ブチブチッ！

「イヤアアアアアッ！」

タイトスカート裾を捕まれ、強引に一気に脱がされる。

一瞬にして、タイツに包まれた下半身が頭になった。

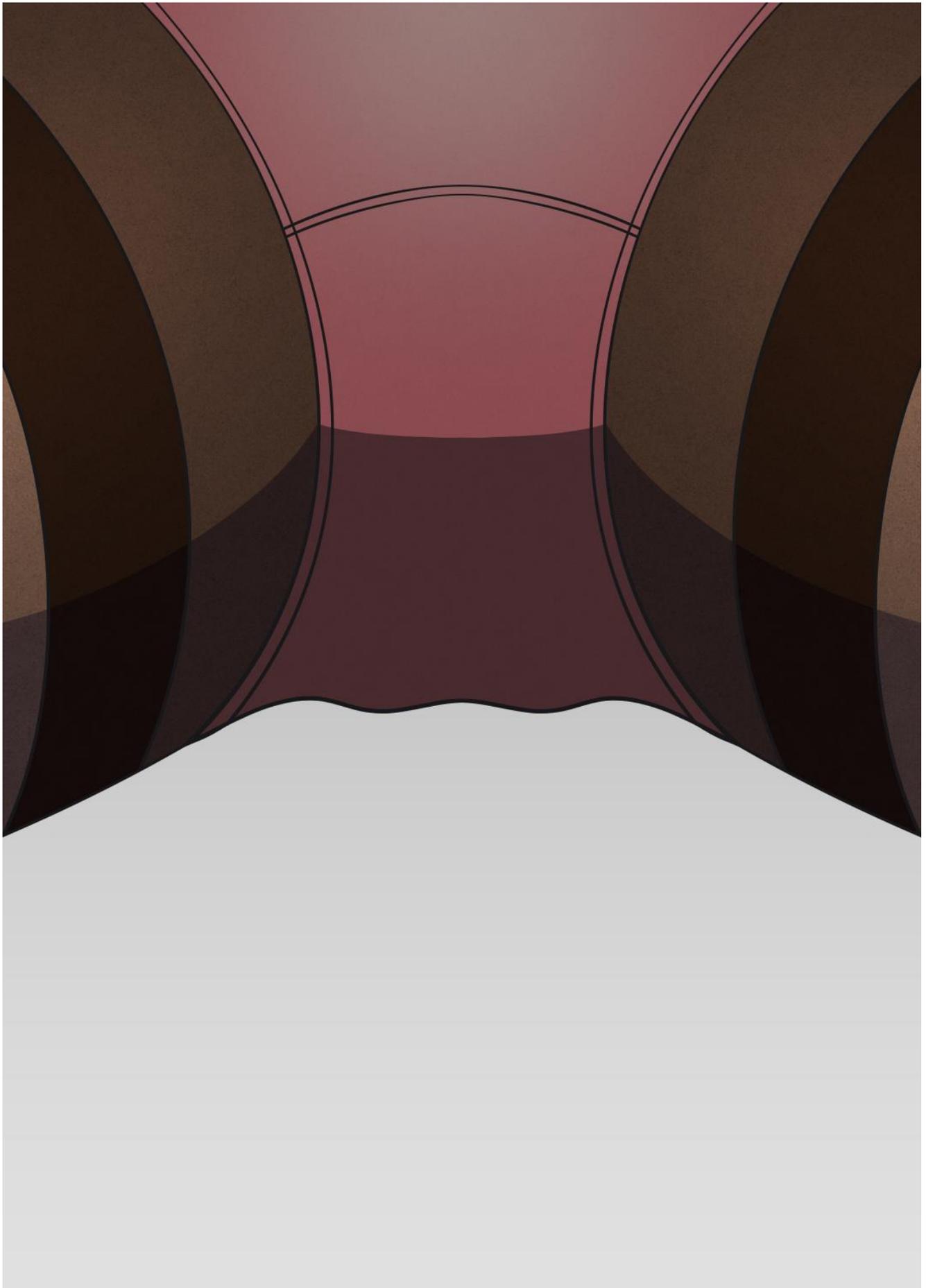
「なっ！ なにをっ!?!」

あたしは太ももをすり合わせ、抵抗しようとするものの、男に無理やり押さえつけられる。

「次はこっちだ……ヒヒッ！」

——ブチブチブチブチッ！

次々に弾け飛ぶワイシャツのボタン、上下おそろいの下着も頭になった。



「おっと、いけねえ、腕が抜けねえじゃねえか」

後ろ手に手錠されたままでは、シャツが抜けないことに気づいたようだ。

「どうせもう着るこたあねえんだ……切るか」

——ジャキッ。

「やっ、やめ——」

なおも、あたしは抵抗しようとするが——。

「おい！ 動くとハサミが刺さるぞ」

「くっ……」

「へへ、それでいい……」

——ジャキッ……ジャキッ……ジャキッ……。

大人しくシャツを切られていく……。

ついには、ブラとショーツ、タイツのみの格好にさせられてしまった。

「うっ、うっ……」

弱みを見せないようにとするが、やはりあたしも只の女だ。

芋虫のように身体を丸め、うずくまることしか出来ない。

「よし……これでいい……」

「飼育開始だ……ヒヒッ！」

こうして、あたしの監禁生活が始まった——。

第三章 飼育

「くっ……」

——ズリッ……ズリッ……。

「ほらよ、きょうからここがおまえの家だ」

犬のように首輪を着けられたあたしは、小さな檻の前まで引きずられてこられた。

——ギイツ……。

「ほら、入れ」

「誰が自分からっ——」

「引きずって無理やり入れてもいいんだぞ？」

「くっ……！」

(ここは大人しく入るしか……)

——ズリッ……ズリッ……。

依然、両手両足を拘束されたままなので、芋虫のごとく這いずる。下着姿がひどく惨めだった。

——ガチャンッ！ カチャッ！

あたしが入ると檻は施錠された。

——カチャン！

首輪から伸びる鎖の先に付けられたフックが檻の壁に固定される。

「ヒヒッ！ 明日からじっくり可愛がってやるからなあ！」

「まっ、待てっ！」

——ギイツ……ガチャンッ！ カチャン……。

男はそれだけ言い残すと、廃屋から出て行ってしまった。

(うう……こんな場所で一晩……何か無いの……?)

二メートル四方ほどの檻には何もなく、床も頑丈な金属板だ。

(ダメね……とても逃げれそうにないわ……)

あたしは諦めて横になる。

まだ夜は肌寒い季節、上半身に直接触れる床が体温を奪う。

下半身はタイツを履いているので、まだマシだった。

(とにかく眠って、体力を温存しよう……)

こうして、あたしは半裸のまま一夜を明かした——。

*

*

*

*

*

——カチャッ！ ガチャンッ！ ギィィ……。

扉が開く、けたたましい音で浅い眠りから覚める。

「よお、よく眠れたか？ ヒヒッ！」

「こんな状態でよく眠れるわけ——」

言い終わる前に、檻の扉に開いた穴からトレーのようなものが差し込まれた。

「ほらよ、朝飯だ」

それは、よくあるコンビ二弁当だった。ある一点を除いて——。

「な、なに……これ……」

まるでドレッシングのように、ドロリとかった白濁したソースから青臭い匂いが漂ってくる。

「ヒヒッ！ 俺特製のザーメンドレッシングだ……しっかり食べるんだぞ」

「——ッ！ こ、こんなの食べれるわけじゃない!!」

精液は全体にまんべんなくかかっていて、避けて食べることもできなさそうだった。

「食ばなきゃ死ぬぞ？ 他には何も与えねえからなあ……」

「ぞ、そんな……」

(うう……で、でも……まだ大丈夫……2、3日ぐらい食べなくなっても……)

「じゃあ、俺は行くぜ……それを食うまでは、次のもねえからな？」

そう言い残すと、また男は廃屋から出て行ってしまった。

(こんなの食べる必要ない……あまり眠れなかったし……とにかく休もう……)

そう思い、横になったのだが——。

——ぐううう……

空腹で眠れない……。

最後の食事は夜勤に入る前に食べた夕食……もう丸一日以上なにも食べていないのだ。

(うう……でも……こんな……)

白濁が降り掛かった食事を見やる……。

(でも、誰か女友達が、彼氏のを飲んだことがあるって言ってたような……)
もしかしたら食べれるかもしれない……そう思い――。

――くん……くん……。

まるで犬が匂いを嗅ぐ様に、トレーに顔を近づける。

(うっ……！ ひどい匂い……ううっ――!!)

一思いに、あまり精液がかかっている様に見える唐揚げにかじりつく。

「――ウツ！ ゴホツ！ ゴホツ！ ゴホツ！」

極力、味を確かめないように食べたつもりでも、酷い悪臭が鼻を突く。

吐き出しそうになりながらも無理やり飲み込む。

――ゴクン！

「けほっ！ けほっ！ うええ……」

なんとか飲み込んだものの、それ以上食べる気にはなれなかった。

しかし、胃にモノが入ったおかげで多少空腹感は和らいだ。

(はあ……これで眠れるかな……)

特に出来ることもないので、体力を温存するべく再び眠りについた……。

*

*

*

*

*

――カチャツ！ ガチャンツ！ ギィィ……。

「んっ……んんう……」

廃屋の扉が開く音で、再び浅い眠りから目覚める。

「なんだあ？ 殆ど食べてねえじゃねえか」

檻まで近づいてきた男が残念そうに言う。

「お？ ひとつは食べた見てえだな？ ヒヒッ！ 俺の精液の味はどうだったんだ？」

男がいやらしい笑みを浮かべながら聞いてくる。

「そつ、そんなの！ 聞くまでもないでしょっ!!」

精一杯の憎しみを込めて、男を睨む。

「ヒヒ……その表情でよーくわかつたぜ」

男はあたしの視線を物ともせず、薄ら笑いを浮かべている。

「ところで、喉が乾いてねえか……?」

確かに、食べたのは、あのおぞましい唐揚げぐらいで、飲み物はずっと飲んでいなかった。

「おら、こつちへこい」

——ガチッ！

「うっ!」

男があたしの首に繋がった鎖を引き、無理やり体を引き寄せる。

「へへッ……これがおまえの飲み物だ……」

——ポロンッ！

下ろしたチャックから勃起した剛直が飛び出す。

丁度あたしの顔の目の前にあるため、精液のすえたような匂いが漂ってきた。

「うっ! く、臭いっ! やめてよ!」

そう抗議の声を漏らす。

「飲め」

こともなげに男はそう言う。

「飲めって……まさか、おしっこっ——!?!」

男がニタァ……と笑う。

「そっだ、これ以外の水分は与えねえからなあ……どうするっ?」

水分……水なしでは人間は三、四日で死に至ると言う……。

(くっ……こは我慢してっ……!)

「ヒヒッ! それでいい……ほら」

あたしは諦めの表情で、男のモノを頬張った……。

「——ンッ!」

——続きは製品版でお楽しみ下さい。